



平成 26 年 9 月 25 日 (木)

報道各位

第 4 回「クリエイターズ殿堂」決まる

故・いずみたく、故・東條忠義、堀川靖晃、故・高宮丈夫の 4 氏

一般社団法人 全日本シーエム放送連盟（略称：ACC、東京都港区、理事長：高田坦史）は、第 4 回「クリエイターズ殿堂」入りクリエイターを故・いずみたく、故・東條忠義、堀川靖晃、故・高宮丈夫の 4 氏に決定致しました。（選考理由は別紙の通りです。）

ACC では CM 表現の向上に関する各事業の一環として、1983 年 7 月に「ACC パーマネントコレクション」（通称：CM 殿堂入り作品）を制定し、CM の歴史に残るすばらしい作品を殿堂入り作品として選考して来ました。CM 作品が殿堂入りすると同時に、このような優れた CM を長年作り続けたクリエイターにも焦点を当てるべき、との考えから、2010 年に ACC 創立 50 周年を記念して、「クリエイターズ殿堂」を設立致しました。

小田桐昭選考委員長はじめ計 5 名（別紙）の選考委員が選考会を開き、第 4 回「クリエイターズ殿堂」入りクリエイター 4 氏を選考し、9 月 25 日（木）の理事会で正式決定致しました。

贈賞は 10 月 31 日（金）に開催する 2014 54th ACC CM FESTIVAL 贈賞式にて行う予定です。また、クリエイターズ殿堂入りしたクリエイターの作品は、アド・ミュージアム東京（東京・港区）、放送ライブラリー（横浜市）で閲覧出来るようになっており、今回殿堂入りした 4 名の作品についても同様に閲覧可能にする予定です。

以上

この件に関するお問い合わせ先
一般社団法人 全日本シーエム放送連盟
〒105-0004 東京都港区新橋 3-1-11 長友ランディックビル 5F
TEL : 03-3500-3261 FAX : 03-3500-3263
URL <http://www.acc-cm.or.jp>
担当：羽鳥俊之

【第4回クリエイターズ殿堂 選考理由、プロフィール】

故・いずみたく氏



<選考理由>

トリローグループの一員となり、野坂昭如氏らと組んで多くの CM ソングを作曲した。特に、名作と言われた明治製菓（当時）の「チョコレートの唄」は ACC 賞ラジオ CM 部門のグランプリを受賞し、現在でも CM ソングとして使われている。また、テレビの CM 映像と音楽という面でも、CM に強い情緒性を与える新しい試みを続けた。後に「オールスタッフ」を設立し、多くの CM 作曲家を育てた。さまざまなジャンルでヒットソングを数多く生み、やがてミュージカルの育成も目指したが、62歳で没した。

<プロフィール>

1930（昭和5）年東京市下谷区谷中生まれ。1946（昭和21）年、第一期生として鎌倉アカデミア演劇科に入学。卒業後、ダンプカーの運転手などをしながら芥川也寸志氏に師事し作曲活動を始める。後に三木鶏郎氏が率いる「冗談工房」に参加し、歌謡曲から、フォークソング、CM ソング、アニメソング、ミュージカル、交響曲と幅広いジャンルの曲を作曲。総数は15,000曲にも上る。1969（昭和44）年には佐良直美氏の「いいじゃないの幸せならば」が第11回日本レコード大賞を受賞。「歌はドラマである」という自らのモットーに基づいて、「見上げてごらん夜の星を」、「おれたちは天使じゃない」など多数のミュージカルも手掛けた。ACC 賞は1966（昭和41）年、明治製菓（当時）「明治チョコレートのテーマ」でラジオ CM 部門のグランプリを受賞。他にも多数受賞。1992（平成4）年5月肝不全のため逝去。62歳。

故・東條忠義（とうじょうただよし）氏



<選考理由>

番組より CM が面白いと言われた「日曜洋画劇場」の中で放映された東條忠義氏のサントリーの CM は、「60秒のエッセイ」と言われ、多くの人たちから人気があった。「開高健よりも開高らしく、山口瞳よりも山口らしい」と言われた氏のコピーは人間の機微の不思議や面白さを、わずか60秒の世界で見事に描いてみせた。知的なエンターテインメントを究めた人であった。「CMは文化だ」と、世の中の人たちに認めさせた人でもあった。



<プロフィール>

1938（昭和 13）年岩手県生まれ。同志社大学を中退、武蔵野美術短期大学入学・卒業後、日本テレビジョンに入社。1964（昭和 39）年創業間もないサン・アドに転向後、開高健氏、山口瞳氏らの知識人の出演を得ながら、「文学 CM」と言われていたサントリーの多くの CM を手掛けた。原点に東條氏自身の生活そのものがあり、それを自然に描くような作風であった。フリーになってからも資生堂「タクティクス」等数多くの CM を企画・演出。ACC 賞は 1974（昭和 49）年サントリー角瓶「雁風呂」、1985（昭和 60）年サントリーオールド「FRIENDS」でテレビ CM 部門グランプリ、特別賞（コピー賞）等を獲得するなど多数受賞。絵画、陶芸、家具などにも造詣が深く、個展も開催。2007（平成 19）年 69 歳で逝去。

堀川靖晃（ほりかわやすあき）氏



<選考理由>

さまざまなスタッフを使いながら、ACC 賞のラジオ CM 部門で 13 年間で 11 回グランプリを獲り続けた偉業を達成。少なくとも、中心のアイデアは堀川靖晃氏がコントロールしていて、ラジオ CM の表現の極致を常に目指していた。現在でも、パナソニックがラジオ CM の力を信じ、ラジオの新しい表現に挑んでいるのは、氏の培ったものが生きているからなのだろう。

<プロフィール>

元松下電器産業（当時）宣伝事業部、元宝塚造形芸術大学専門職大学院教授。1964（昭和 39）年入社。1969（昭和 44）年、松下電器産業（同）「ナショナルステレオ 虫の音」で ACC 賞ラジオ CM 部門グランプリを受賞したのを皮切りに、同部門では 13 年間に 11 回のグランプリを獲得。1971 年のフジサンケイグループ広告大賞のグランプリはマスコミ 4 媒体にメディアミックスを加えた 5 部門それぞれの最優秀作品で競う枠組みであったが、ラジオ CM 「ナショナル浄水器 水の旅」（同年の ACC 賞ラジオ CM 部門グランプリ）が他の 4 部門を押さえて受賞。1983（昭和 58）年には「テクニクス EXE 原音の心 シリーズ」でテレビ CM 部門全日本フィルム CM 大賞も受賞。1981（昭和 56）年度第 15 回大阪広告協会「やってみなはれ佐治敬三賞」を「堀川靖晃とラジオ CM 制作グループ」として受賞。72 歳。

故・高宮丈夫（たかみやたけお）氏



<選考理由>

初期のテレビ CM は、カメラと照明は完全に分業化されており、全体のトーン&マナーの決定者は誰であるのかははっきりしていなかった。やがて、スチールカメラマンの参入が盛んになると彼らは照明の設計も、当然のように自分で行うようになった。撮影の規模が大きくなったり、人物の動きがダイナミックなものになると、分業としての照明が必要となり、スチールカメラマンの意図を理解し、実行できる照明マンが必要となった。そこに登場したのが、高宮丈夫氏だった。もちろん、間接照明など、グラフィックな映像に近づく試みをしてきた照明マンは、それまでにもいなかったわけではない。しかし、照明マンが単独に「才能」として業界の人々の話題になったのは高宮氏が初めてだと思う。影を消すたびに、ライトがまたひとつ増えて行くという、ハリウッドスタイルのはん雑な照明から、むしろ陰影こそが美しいという CM 独自の映像を確かなものにした氏の革新性は今でも日本の CM の中に生きている。

<プロフィール>

1931（昭和 6）年 9 月 5 日生まれ。東京都世田谷区出身。私立麻布高校卒業。1963（昭和 38）年頃から日本天然色映画にてライトマンとして活躍。1969（昭和 44）年杉山登志氏と組んだ資生堂「サンオイル」、帝人「水着」で ACC 賞テレビ CM 部門金賞受賞。以後毎年様に秀作賞などを受賞。1979（昭和 54）年には松下電器産業（当時）「自転車、特訓」で ACC 賞全日本 CM 大賞受賞。サントリー、レナウン、味の素等数々の名作のライティングを担当。後進も多数育成した。1995（平成 7）年 63 歳で逝去。

【第 4 回クリエイターズ殿堂 選考委員】（五十音順）

選考委員長 小田桐昭氏

選考委員 坂田耕氏、杉山恒太郎氏、武部守晃氏、宮崎晋氏

以上